

# 研究のまとめ

## I. はじめに

本研究主題「働くための環境設定とシステム作成の試み」は単年度研究である。

過去7年間の「最適化」の研究成果を活かしながら、本年は卒業後の環境である「働く」ということをターゲットとした。

また、授業における指導・支援の在り方を、人的環境設定と物理的環境設定を核としながら、本校としての「働くこと」について導き出すことを目的としている。

同時に各学部で系統性を考慮しシステム作成に関しても試みている。それらについてはFig1. 働くための環境設定とシステム関連図でまとめている。

本年度の研究は、「働く」という位置づけを児童生徒一人一人の卒業後の環境として仮定している。普段の授業に「働く」指導や「働く」支援の観点を意図的に取り入れ、その妥当性を検討する。

授業及び支援の観点を「働く」部分から取り入れる研究である。従来の授業に拠点を置いてアプローチするよりも、より人間関係の形成の高まりを促進させられるのではないかと考えている。また、卒業と同時に問われる「働くため」の技量面スキルアップには直接的につながるのではないかと考えた。このアプローチにより、学校教育目標に掲げている「自分の持っている力を精一杯発揮し、積極的な社会参加ができる」という授業を再現した。

これまでの研究の成果を基礎として、さらに学校生活の多様な指導場面で応用して活用できるかが問われている。小学部は「清掃」、中学部は「販売」、高等部は「作業学習全般」を本年度は検証した。

## II. 今年度の各学部の成果

### 1. 小学部「指導内容表を核とした清掃活動」

小学部の実践では、「清掃のための小学部段階指導内容表」を用いて検討が行われた。それまで学級独自の方法で行われていた清掃活動を取り上げ、指導内容表を作成した。作成にあたっては中学部や高等部そして卒業後までを見通した清掃活動をリサーチし、その上で小学部段階での系統性を考慮に入れ

た。

ここでは、指導前と指導後の評定値の大きな変化がエビデンスとなった。最初から評定値が高い児童は、伸び率は小さいものの高くなった。最初は評定値が低かった児童は、伸び率を大きく伸ばした。また、児童一人一人のアセスメントを大事にしており、スキルに焦点を絞って見ている。認知的にも身体的にも伸び率が適当であったことが示唆されている。

以上のように、児童一人一人の卒業後の「働く」姿を想定し、そこから考えられた姿を「清掃」の授業に融合させることができたと考える。授業においては、机を持ちあげて運ぶ時間が長くなったり、手順表を自ら必ず見について確認したりなど、児童の授業への集中力の向上や周囲に合わせて働こうという意欲的な態度が見られ、授業のねらいが達成できたのではないかと考える。

### 2. 中学部「人とかかわりの大事さを知る販売活動」

中学部の実践では、「販売活動におけるマニュアル」を用いて検討が行われた。中学部は人とかかわりを多く必要とする「販売」を取り上げている。生徒たちの今後の進路を考えると、人とかかわりが求められる介護職等への展開も十分に考え得る。人的環境設定が非常に大事なウエイトを占め、「生徒同士をつなぐ支援」と「状況に応じたあいさつの仕方」が大切になってくる。また、生徒同士は、協力して活動に取り組む必要がある。ねらいを達成するために自分の役割を理解し遂行すると同時に、友達の役割も理解して状況判断しながら手助けする必要がある。生徒は、友達の意図を察して行動を合わせたり、地域の買い物に来てくださったお客様にしっかりとあいさつしたりする行為等が見られた。

以上のように、生徒同士が協力してお互いの関係を深めながら「販売」の活動をすることができたと考える。それは、人的環境設定をしっかりとおさえたことによって、生徒間の連携をうみ、スムーズに運営できるなど、良い効果をもたらしており、授業のねらいの達成できたと考える。

### 3. 高等部「徹底したマニュアル活用を基盤とした作業学習」

高等部の実践では、「事務・清掃班」「陶芸班」「リサイクル班」の「作業学習におけるマニュアル」を用いて検討が行われた。実践の回数を重ね、スキルが高次化するに従い、マニュアルは改訂されるごとに手順が減っていった。通常における作業マニュアルは、やりにくい部分にターゲットを絞り、分析により細かい手順としていくものである。しかしながら、高等部の「事務・清掃班」「陶芸班」「リサイクル班」作業マニュアルは、改訂を繰り返すごとに手順が少なくなる。精緻なマニュアルを最初に作成できると、このようなメリットがうまれるといっても良いであろう。また、最大のメリットは、改訂されたマニュアルはすべて来年度以降も使うことができることである。「この生徒にはどのマニュアルが合うだろうか?」「この生徒には、第3版からのマニュアルで作業を行わせてみよう」と、今後も作業種が変わらないのであれば、十分に活用できる。以上のように、マニュアルを精緻に作成することにより状況に適応した行動や、集中力が増しスキルがあがった。これは、授業のねらいの達成に大きく作用したと考える。

## Ⅲ. 今年度のまとめ

### 1. 環境設定の観点は有効であったか

各学部の成果からも分かるように、各学部で実践した授業は多種多様で創造的であった。「働く」という卒業後の環境設定から考えられた授業は、数値的に現れ、検証できた。そうした中で、一人一人の児童生徒に応じた、オーダーメイドの環境設定やシステムを体系化する観点をを用いた指導、支援は、各場面において有意に作用した。また、行動評価として数値的な上昇を促進させた。小学部においては、指導内容表を核としながら、児童一人一人の技能的なスキルアップを図ることができた。また中学部では、生徒同士のかかわりを深め、地域の人との実際的な交流を通して人とかかわりの大事さを知る活動ができた。さらに高等部では、精緻なマニュアルを作成することにより、卒業後の社会に出てからでも適応できる活動を促進できた。上記は指導場面が変わっても「働く」という卒業後の環境設定から指

導・支援の観点を考えたことにより、適切に児童生徒の将来の社会参加に向けての発達を促すことができたことを表していると考ええる。また、それは、各学部の研究における行動評価にも確実に現れている。

### 2. 従来の授業に「働く」力を育む授業を融合させる

次に、従来の授業に「働く」力を育む授業を融合させた結果について検証してみる。「働く」ことから考えられた環境設定の観点は、授業のねらいを図るために用いられる。つまり、授業のねらいと環境設定の観点は重なり合うと考えられる。授業のねらいが、環境設定に関するものを多く必要とするのであれば、支援の観点は合致し有意に作用する。しかし授業によっては、環境設定の観点と関連が薄い場合もある。本校の実践事例においてもいくつかそのような授業がある。そのような授業であっても授業のねらいは達成され、さらに数値として現れ、授業のねらいは達成できている。しかも支援の観点として環境設定をしっかりとおさえることにより、児童生徒の活動意欲が増したり、授業がスムーズに展開したり、互いに助け合いながら集団活動ができたりなど、授業は確実に改善した。これは授業のねらいと「働く」ことから考えられた環境設定の観点が両者独立して達成させるのではなく、この二つの概念が融合して相乗効果をもたらし、より効率的で効果的な授業が構築されたことを示唆していると考えられる。

### 3. システム作成を通した系統的な授業のねらい

以上の考えを基に、児童生徒の12年間の教育システムを見通して「働く」ためのオーダーメイドの授業を、計画的に系統的に創造していくことが求められる。研究の結果から考察される、それぞれの授業の指標を考えてみると、「働くための環境設定とシステム作成」を成立させるためには、「人的環境設定と物理的環境設定」を小学部、中学部、高等部、そして、卒業後までを見通して設定し、授業に融合させる。次に、マニュアルや指導内容表をしっかりと作り込むことが必要となってくる。この手続きさえ、精緻に行えば、児童生徒は自ら活動し、スキルもアップし、意欲もあがることが分かった。

「働くため」の授業は、「状況判断して活動する」

ことが大事になると思われる。それらは、個々の発達課題に沿って、授業のねらいに据えていくことが望ましいと考えられる。

#### IV. 研究のまとめ

研究主題を設定するにあたり、本校や地域で求められる研究課題を模索した。見出された課題の中には、キャリア教育の観点による授業の見直しや地域や弘前大学構内に児童生徒自身が出向き、彼ら自身を知ってもらうことの必要性が大きくあげられた。そこで、社会やその取り巻く環境をどう受け入れてどう自ら働きかけるかに焦点をあてた研究が必要との見解に立ち、本研究主題「働くための環境設定とシステム作成の試み」が設定された。

本校においては、これまで児童生徒に対し生活環境の調整を図り、環境の構造化、視覚的支援等、一貫して分かりやすい支援を目指し「最適化」を行ってきた。その成果は大きく、児童生徒は環境を整えれば、自ら主体的に学校生活を起こることができるようになり、何より、自分一人で「できる」自信をもてることにつながった。本校が取り組んできた教育実践は一定の成果を上げることができた。そこに、「働く」環境設定をこれまで以上に盛り込んだ授業を展開することで新たな可能性を探ろうと考えた。

本校ではこれまで「最適化」という言葉をキーワードとして、ターゲットを絞り込み、どうすれば最適な状態になるかを、プログラムを立てて学習したり、効率的に学習していくにはどうするかを考えたりすることで研究を継続してきた。その成果は確実に児童生徒を向上させた。しかもその効果は、個人のみならず、集団を伸ばすことにつながったのである。今回さらに、「働く」ことをイメージした環境設定を盛り込むことにより、相乗効果を生起させ、より学習活動を有機的に向上させた。しかもこれは、「働く」から想定される授業の有用性を確認できたと考える。

#### V. おわりに

本研究のまとめにあたり、本研究主題「働くための環境設定とシステム作成の試み」の実践研究は、本校の授業にどのような変化をもたらしたであろうか。それは、これまで積み上げてきた「最適化」の

授業に、新たに、「働く」という観点である児童生徒一人一人の卒業後の環境を想定した環境を大切にしたい視点を付加していくことである。また、将来の社会生活と今の現実とをつなぐ連続した授業を考えていくことである。具体的には、授業においては計画的に「働く」ための授業を融合させ、人的環境設定、物理的環境設定を整える。さらには小・中・高という学部の系統性を考え授業を構築する。それは「働く」意欲を育むことにつながる。

本研究は、児童生徒の卒業後を見据え、将来豊かな「働く姿」で社会により良くなかかわっていくことを期待するものである。

(謝辞)

本研究は、今年度本校で実施している緊急カウンセラー等派遣事業並びに就労支援アドバイザー事業の方々から指導に関する手立てなどを助言いただいた。ここに記して深謝する。